

## 〈海外留学だより〉

## ボストン留学報告

視覚機能再生外科学 小 森 秀 樹

私は平成23年8月30日からの2か月間、厚生労働省の若手研究者等海外派遣プログラムによる助成をいただき、ボストンのハーバード大学マサチューセッツ眼科耳鼻科病院(Massachusetts Eye and Ear Infirmary)に短期留学させて頂きました。

ボストンは人口約60万人とあまり大きな都市ではありませんが、アメリカ北東部ニューイングランド地方の最大の都市で、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学(MIT)、タフツ大学、ボストン大学など多くの有名大学を擁し、世界中から研究者や技術者が集まるアカデミックな都市です。また、建国史上重要な役割を果たしている点においても京都と共通の特徴を有する都市であり、実際、京都とボストンは姉妹都市の関係にあります。医学方面では、ア

メリカ東部最大かつ最古の病院であるマサチューセッツ総合病院をはじめ、ジョスリン糖尿病センター、プリガム・アンド・ウイメンズ病院、ボストン小児病院など錚々たる医療機関が存在するため、どの診療科のドクターにとっても馴染みがある都市となっています。留学先のMassachusetts Eye and Ear Infirmaryは1824年に設立されたハーバード大学の関連医療機関です。著名な診療スタッフ、豊富な症例数、充実した教育システム、これまで多数の教授を輩出している歴史的背景などより、世界中から多くの若い医師がapplyしてくるため、レジデントやフェローには狭き門をくぐり抜けた優秀な人材が揃っています。今回の留学先としてMassachusetts Eye and Ear Infirmaryを選んだのは、第一の理由として、糖尿病網膜症や重症網膜剥離に対する硝子体手術において卓越した技術を持っている著名な網膜硝子体サージャンであるDr. Dean Elliottから増殖性硝子体網膜症に対する網膜切開手技や日本では稀にしか行わない網膜・脈絡膜生検法などを学び、手術方法についてのdiscussionを行うため、第二の理由としては、眼内腫瘍の世界的権威であり、脈絡膜悪性黒色腫に対する新たな治療法を開発してきたEvangelos Gragoudas教授のもと、有病率が少ないために日本では経験することが難しい様々な眼内腫瘍症例を経験し、眼内悪性腫瘍のマネジメント技術を修得したいと考えたからです。

私がボストンに滞在したのが、8月末から10月末というのも大いに関係していると思いますが、ボストンは予想以上に住みやすく快適な街と感じました。市の中心部は非常にコンパクトにできているうえ、地下鉄網が発達しているため、ほとんどの場所へのアクセスが容易でした。おそらく、郊外に出向かない限りは、自動



車よりも地下鉄+徒歩が便利な都市だと思えます。長く厳しい冬が来る前のこの時季、ニューイングランド地方は最高の季節を迎えますが、緑の木々が赤く染まっていくのを愉しみながらのチャールズ川沿いやボストンコモン散策は格別で、オフの楽しみのひとつでした。とにかくこの時季、気候の良い日が多いので、休日には、レンタカーでニューハンプシャーに紅葉を見に行ったり、フェンウェイパークで本場のベースボールを堪能したりしました。ちなみに、ボストンの地ビールである Samuel Adams は個人的に大のお気に入りです。

Massachusetts Eye and Ear Infirmary では、Dr. Dean Elliott や Gragoudas 教授だけでなく、多くの網膜硝子体専門医の手術を見学し、難治性網膜硝子体疾患に対する手術戦略や細かなテクニック、手術機器の設定、手術器具の改良、術中使用薬剤などについて、多くの discussion を行うことができました。網膜硝子体専門医という共通点はあるながらも、それぞれ専門分野が異なる9名のドクターと議論することによって、多種多様な考え方や個人のこだわりについて意見交換することができたのは、多くの専門スタッフが常勤している施設だからこそできたことと感じています。なかでもやはり Dr. Dean Elliott の手術を通じて、前部増殖性硝子体網膜症に対する安全で侵襲の少ない減張網膜切開術

や Chorioretinal Biopsy を学び、術後成績を検討できたことは大きな収穫でした。とくに、低侵襲 Chorioretinal Biopsy は今後、眼底疾患の病理学的検討を推進していくうえで非常に有益なテクニックだと確信しました。もちろん手術だけでなく、多くの網膜専門外来に参加し、日本ではあまり遭遇することのない疾患を多く経験しました。とくに Gragoudas 教授の外来においては、非常に多数の眼内悪性腫瘍やその類縁疾患患者の診察に携わり、各種治療による効果に違いについて検討してきました。また、日本ではまだ臨床応用されていない新たな硝子体内インプラント徐放薬の効果についての知見も得ることができました。

留学先でお世話になったスタッフの方々、ボストンでできた多くの友人達のおかげで、2か月間という短い期間の留学ではありましたが、毎日が非常にエキサイティングで濃密な日々であり、3~4か月に匹敵する有意義な留学生活を送ることができたと思います。この留学を通じてできた人の繋がりは、今回私ができることができた何よりも大きな財産です。

最後に、今回このような貴重な機会を与えて頂きました木下教授、小泉範子教授、そして大学不在中さまざまなフォローをしてくださった方々に、この場を借りまして御礼申し上げます。ありがとうございました。

